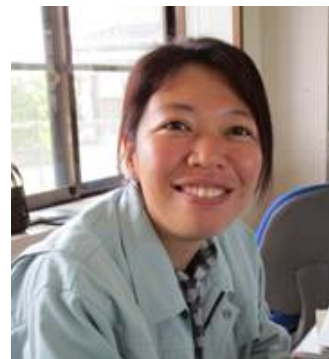


私の考える普及のこれから

西部農業改良普及所大山普及支所 西條 由紀

鳥取県の人口は日本一少なく、平成17年には60万人あった人口は平成30年4月時点で約56万人と推定されている。また農業分野に目を向ければ、どの作目においても高齢化・後継者不足の波が押し寄せている。日本全体でも人口は減少に転じており、これからの未来は労働人口の減少に伴い、AIが活躍する未来が予測されている。



そのような状況の中で農業や普及の在り方をどのように考えていくか、また異動があり人が動くことを考えた上で、～普及員という個としてではなく、普及所という組織が農業・地域にとってどのように役に立つのかを考えることがこれからの普及活動に必要なことだと考える。

「一普及員」として

○「話を伝える」ではなく、「伝わる話をする」人であること。

「伝えた」よりも「伝わったか」。普及員は色々な話をする機会が多いが、どのように話すかよりもきちんと相手に伝わっているか。「ハウレンソウ（報告・連絡・相談）」から「ハウレンソウカク」（報告・連絡・相談「確認」）で、きちんと伝わっているかを確認するのも重要と考える。普及員というよりも仕事やコミュニケーションの一手法的な考え方になるが、「話すのが仕事」ではなく「伝えるのが仕事」という意識が必要だと思う。

○情報の取り扱い（収集・精査（取捨選択）・発信）ができる人であること。

色々な情報が手に入りやすくなっているが、情報の良し悪しを判断する力が必要になる。ネット情報は早いけど玉石混交、紙媒体はスピード感としては落ちるが、何人もの目を通り推敲されているため、情報としての正確さ・質は高いと考える。どちらかだけを使うのではなく、どういうときにどういうソースを用いるかといったことも学ぶ必要があると思う。

○経営（お金・数字）の話をする人であること。

農業者は、一経営者としての自覚が今以上に必要になる。補助金ありきの経営ではなく、自分の家（経営）のことを数字で語れるか、儲けるためにはどうしたらよいかをシビアに考えていくことが、農家というより経営者として必要になってくるだろう。普及員がそういった話をするためには、経営する側の視点・知識を身につけることが必要だと思う。

「普及所」という組織として

営農は天候や気温に左右される日々の管理とともに、どういったところを目指すかという中長期的な視点も必要である。日々の状況に対応できる臨機応変さと、ずれてはいけない目標が重要だと思う。組織としては近視眼的になることなく、鳥取県の農業のあるべき姿への道筋をきちんとつけ、普及が支援を行う農業の方向性がぶれないようにすることが、人が変わっても必要とされる組織となっていくのではないかと考える。

昭和の名経営者、土光敏夫は「組織は上下の雛壇ではなく、丸い円と考えろ」という言葉を残している。特に普及所はこういった組織論で活動・業務を進めていくことが地域や農業者のためになるのではないかと考える。